

## 書評・紹介

G. マズニック, M. ベイン著 (井手生監修, 青木久男・久門道利訳)

『アメリカの家族 1960—1990』

多賀出版, 1986年, 242pp.

本書は近年アメリカの家族に生じた変化の動向とその要因の解明のために書かれMITとハーバード両大学の都市研究合同センターより1980年に刊行された『The Nation's Families: 1960—1990』の翻訳である。

目次を掲げれば、第一章「序論」、第二章「人口、世帯、家族」、第三章「女性の仕事と家族収入」、第四章「変わりゆく家族、変わりゆく時代」、そして巻末に付録として関連文献と各章の原データの統計表が収められている。各章のテーマをみれば判かるように、本書ではアメリカの家族の変化を主として二つの側面から考察する。一つは人口と世帯の動向の側面からの解明であり、もう一つは女性の就業動向の側面からの解明である。これらの側面を解明するための方法はコウホート分析であり、本書の分析ではアメリカの人口を大きく三つのコウホートすなわち、1920年以前生まれ（高年世代）、1920～40年生まれ（中年世代）、1940年以降生まれ（若年世代）に分けて分析する。

人口と世帯の動向を左右しているのは主として二つの要素、すなわちコウホート規模の変化と各コウホートの世帯形成にみられる特徴的なパターンの変化であるとする。コウホート規模変化の影響については、若年世代のベビーブーム・コウホートが現在と今後の年齢構成と世帯の構成に与える影響が大きいことを指摘する。世帯形成パターンについては、高年世代は晩婚で結婚後も親と同居するなどのケースも多く両親世帯と密接な結びつきがあったという。中年世代は、経済の好況期にめぐまれ若くして結婚し両親から独立して世帯を持ち子供数も比較的多かったが、近年になって離婚が増加しているという。またベビーブームを含む若年世代では結婚に関し高年世代と同じパターン戻り、晩婚で未婚のまま過ごすものも多くなり、離婚がかなり多いという。近年における夫婦世帯割合の減少、片親と子供の世帯の増加、女性が世帯主の世帯の増加、男女を問わない1人世帯の増加といった世帯類型の多様化と世帯規模の縮小傾向の要因は、高年世代では子供の巣立ちと配偶者との死別などにより、中年世代では子供の巣立ちと配偶者との死別、離別と別居などにより、さらに若年世代では子供数が少ないことや離別と別居の他に未婚のまま家族と離れて過ごすものが近年になって増加していることなどによるという。

女性の就業では近年における女子労働力率の上昇と離婚の増加や女性世帯主の増加、世帯類型の多様化など近年の世帯動向との関連を指摘する。女性の就業については三つの側面に注目する。第一は女子労働力率の動向であり、これは中年世代、若年世代と次第に高くなっており既に男性にかなり近い水準に達している。第二は、女性の就業への関わりの深さ就業意欲の強さである。本書ではこれを労働へのアタッチメントと呼ぶが、端的に言えば、労働力としての参加の実態がパートタイムかフルタイムか、就業が年間の一部かそれとも通年か、勤続年数の長さといったことである。この側面について中年世代まではパートなどの比重が大きく必ずしもアタッチメントが大きくはないが、若年世代ではフルタイムの女性が増えるなどの動きが進行し、将来のアタッチメントはかなり大きくなるとみる。第三は女性の就業の家族収入への貢献度である。この面に関して現状は賃金の安いパートの比重が大きだけでなくフルタイムでも男女の賃金格差があり家計に対しては補助的役割にとどまり、女性の収入が今後どの程度まで伸びるかはかなり問題だという。

本書の特色はアメリカの家族の変化の解明に人口学的方法の一つであるコウホート分析を用いたことにあり、成功しているといえる。使われた人口のデータには、続柄別の世帯員の集計や所属世帯の類型別世帯員の集計など日本の世帯統計などにおいても集計が望まれるものがある。訳は比較的平明であり読みやすいが、訳語の中で婚姻状態、世帯関係などはそれぞれ配偶関係、続柄などの慣用的表現にすべきではないだろうか。

(渡邊吉利)